

## 第7回 亜麻工場の盛衰

### (1) 亜麻工場の盛衰

亜麻産業は軍需産業と言われるだけに動乱によって需要は大きく変動する。景気がよくなると新しい工場が進出し、不景気になると経営能力に欠ける工場は、新設工場に限らず、老舗といえども倒産、あるいは合併を余儀なくされている。亜麻工場の経歴を羅列してみよう。

一般産業には見られない凄まじい変動である。図1は亜麻工場の分布図である。全道隈なく分布している。建設された工場は85を数えるが、第二次大戦後、化学合成繊維が発達して、次第に圧迫される。例えば、身近なものとしてブルーシートなどは、亜麻繊維で作られた帆布には耐久性で劣るとしても、安価であり、手軽に入手できるようになれば、亜麻製品にはとても勝ち目はない。

図1：明治～昭和に設立された亜麻工場の分布

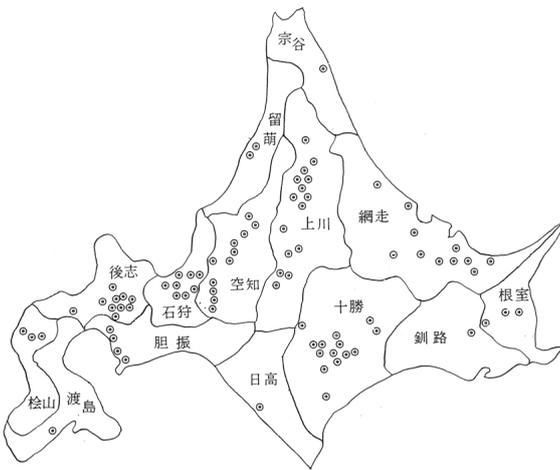


図2：道内亜麻原料工場一覧（昭和32年）



- |            |            |            |            |
|------------|------------|------------|------------|
| ① 虻田 (帝麻)  | ② 伊達 (帝麻)  | ③ 留寿都 (帝麻) | ④ 琴似 (帝麻)  |
| ⑤ 月形 (帝麻)  | ⑥ 栗山 (帝麻)  | ⑦ 静内 (帝麻)  | ⑧ 富良野 (帝麻) |
| ⑨ 美瑛 (帝麻)  | ⑩ 芽室 (中織)  | ⑪ 帯広 (中織)  | ⑫ 音更 (中織)  |
| ⑬ 止若 (中織)  | ⑭ 大樹 (帝麻)  | ⑮ 池田 (中織)  | ⑯ 本別 (中織)  |
| ⑰ 標茶 (中織)  | ⑱ 中標津 (帝麻) | ⑲ 斜里 (日織)  | ⑳ 美幌 (日織)  |
| ㉑ 留辺蘂 (日織) | ㉒ 湧別 (日織)  | ㉓ 名寄 (帝麻)  |            |
- 帝麻=帝國製麻株式会社  
中織=中央纖維株式会社  
日織=日本纖維工業株式会社

ロープや結束紐などについても同様である。亜麻産業は次第に縮少の止むなきに至る。

昭和32年（1957）には亜麻工場は23である（図2）。亜麻栽培は昭和42年（1967）で栽培を打ち切られるが、昭和40年（1965）まで稼働した工場はわずか14に過ぎ

ない。図3、4は亜麻工場の消長を示したものである。図5には茎生産量と工場数の関係を示した。

ピークは第一次大戦後の大正11（1924）、第二次大戦中の昭和18（1945）の2つである。第一次大戦中から菜豆やバレイシヨ澱粉が高値で輸出され、北海

道農業は景気に沸き立つが、この時期にヨーロッパからの亜麻製品の輸入が途絶したために、製麻業界はそのぶん国内生産しなければならなかった。未曾有の好況の到来ではあったが、それにしても新会社や工場の乱立は異常である。原料争奪戦



村井 信仁

1932年、福島県生まれ。55年、帯広畜産大学卒業。山田トンボ農機株式会社、北農機株式会社を経て、67年に北海道立中央農業試験場農業機械科長、71年に同十勝農業試験場農業機械科長、85年に同中央農業試験場農業機械部長を歴任する。89年には社団法人北海道農業機械工業会専務理事となる。農業の現場に即した機械の開発や研究、指導で農業経営者から厚い信頼を得た。退任後、67歳にして新規就農を果たし、農場主となる。著書に『耕うん機械と土作りの研究』など。農学博士。

図3：亜麻工場の経歴

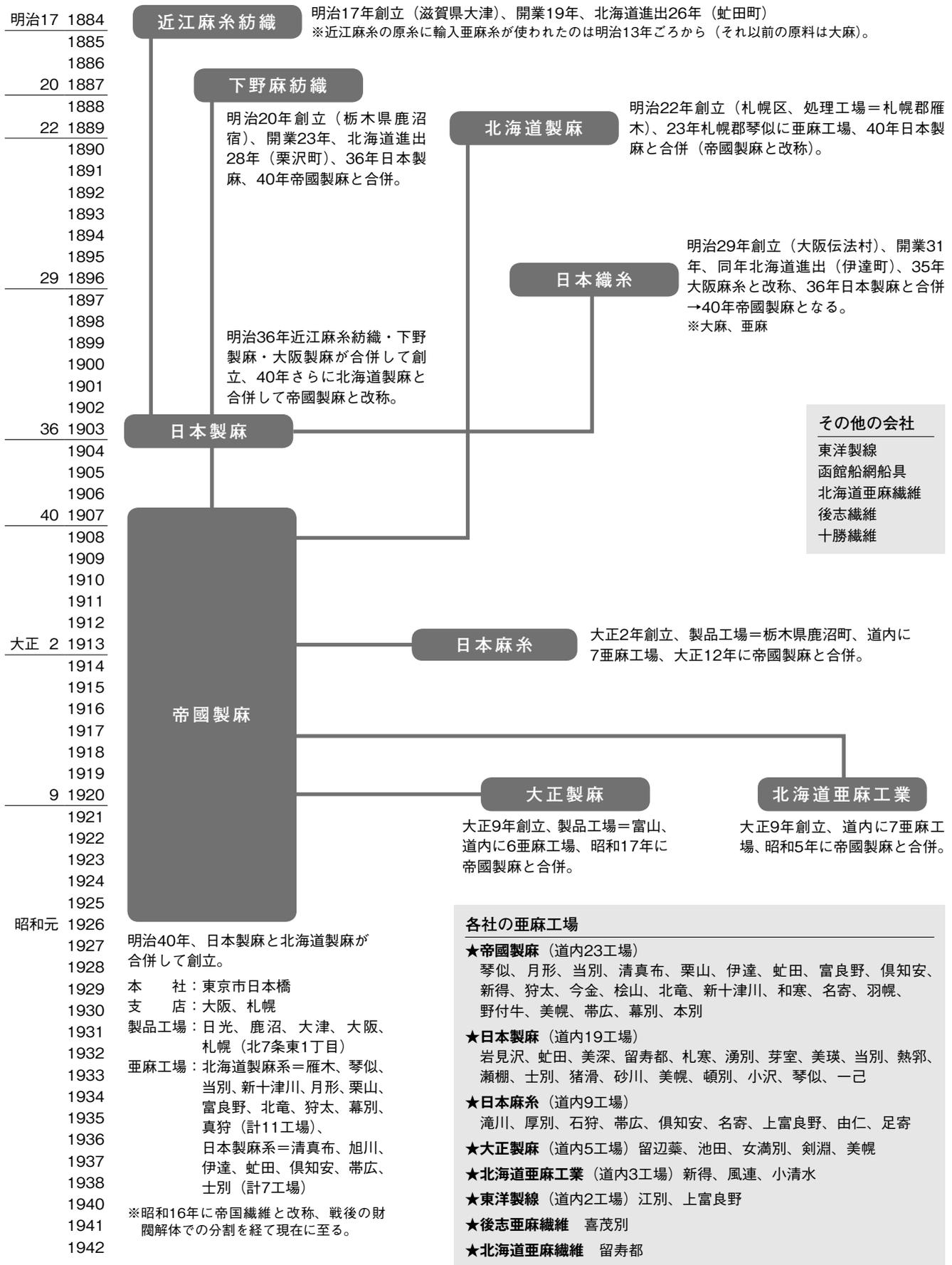


図4：亜麻工場の設立と閉鎖年度 設立・閉鎖年には一部推定がある

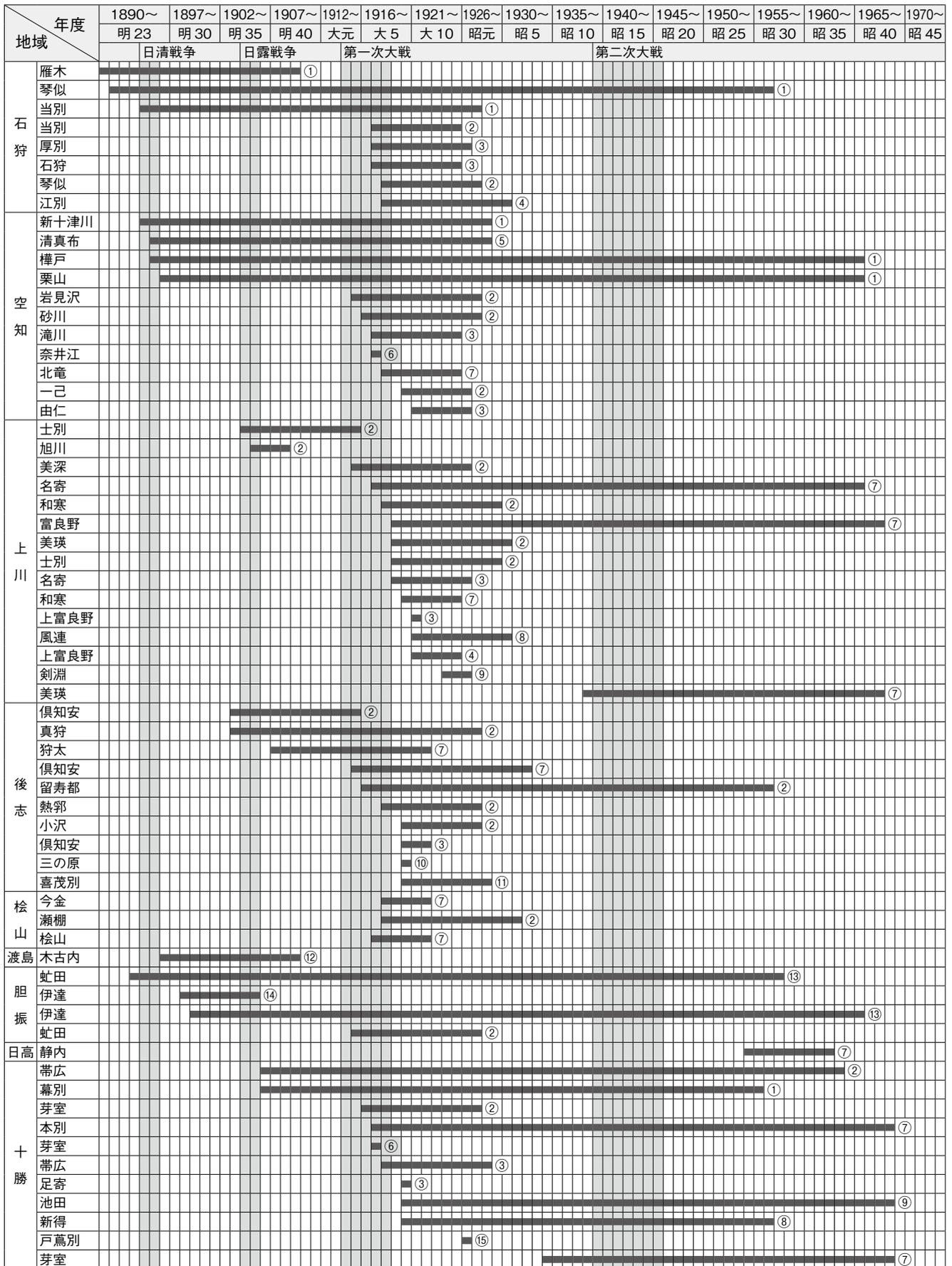
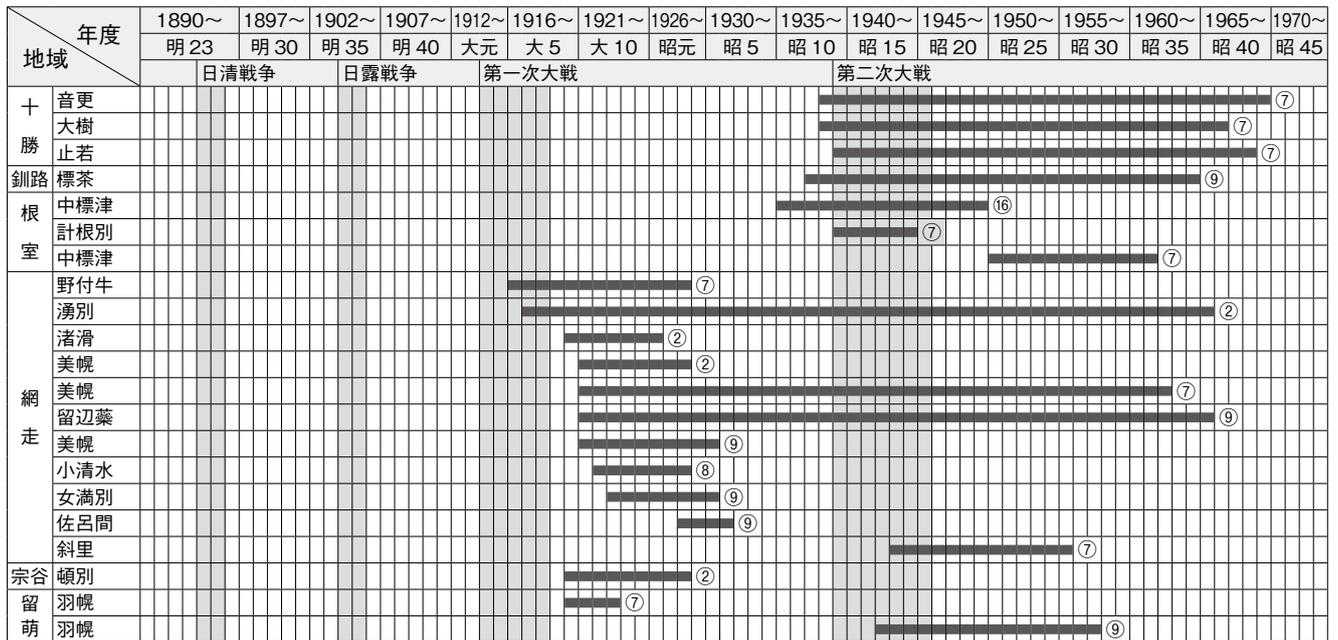
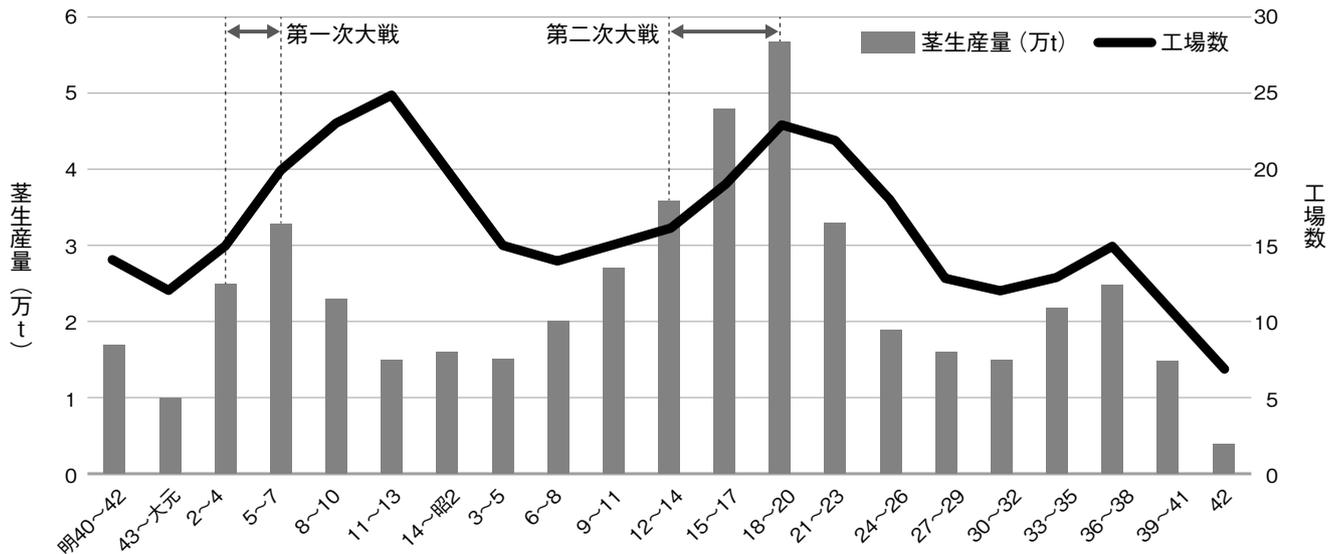


図4：亜麻工場の設立と閉鎖年度（続き）



①北海道製麻 ②日本製麻 ③日本麻糸 ④東洋製線 ⑤下野麻紡織 ⑥函館船網船具 ⑦帝國製麻 ⑧北海道亜麻工業 ⑨大正製麻 ⑩北海道亜麻織維  
 ⑪後志織維 ⑫渡島織維 ⑬近江麻糸紡織 ⑭日本織糸 ⑮十勝織維 ⑯山木織維

図5：3年平均の茎生産量と工場数（帝國製麻）



が語り草になつてゐるが、熱しやすく、冷めやすいといふのはこうしたことを指すのであろう。その後の景気の反動、金融恐慌もあつて整理を余儀なくされる。

不景気は長く続くが、満州事變のころから回復しはじめ、第二次大戦に入つてまた大きなピークを作る。しかし、これも長くは続かない。戦争が終結すると奈落の底であり、続いて、化学合成繊維の台頭で、戦後20年にして亜麻産業は終焉を迎える。最盛期には4万haを超える栽培面積で、経済的にも技術的にも北海道農業を先導してきたが、あまりにも劇的な最後であり、亜麻産業の宿命とはいえ、言葉を失う。動乱が介在する産業はこういったものなのかもしれない。

**(2) 今も残る工場遺構**

北海道製麻が最初に建設した札幌工場は、原料繊維を他工場に求めてこれを加工する工場であつた（写真1）。屯田兵村では大麻を栽培していたので、当初は大麻が主体で、順次亜麻を加えるものとした。亜麻栽培が軌道に乗るまではベルギーやイタリアなどから原料を輸入していた。

明治23年（1890）から操業するが、男女合わせた工員は約400

名と言われている。札幌の人口が2万1000人程度だったので、大企業の出現である。

工場のボイラーや煙突などは操業を終えても使用できる状態であったので、一部改良されて、現在では地域の暖房に利用されている（写真2）。大きな煙突であるので、事情を知らない人からあの煙突は何ですかと聞かれることが多い。札幌の誇る製麻工場であったことを知る人は、北海道に初めての大企業の出現であり、実績も認めており、あれは製麻工場の煙突と胸を張る。

北海道には亜麻工場の記念碑が二つある。その一つは札幌市北区麻生にある。「亜麻産業発祥の地」とされているが、帝國製麻琴似製線工場は、当時の北海道製麻が明治22年（1889）に建設した雁木製線所に続いて、明治23年（1890）に琴似町新琴似に建設したもので2番目に当たる。

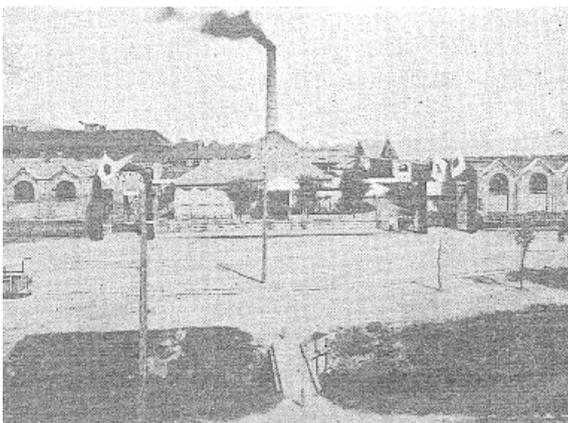
「亜麻産業発祥の地」とするについては多少疑問が残る。ただ、雁木製線所はスケールが小さく、明治42年（1909）に20年の操業で閉鎖していることからすれば、昭和32年（1957）まで67年もの長い間操業しており、明治時代は石狩が先進地である。指導的立場にあったと考えられるので、とやかく言わず、発祥の

地としても許されてよいとも思える。

麻生町3丁目の工場長宅跡には赤松が植えられており、北区歴史文化88の中に選ばれている。麻生緑地公園内には亜麻の花咲く手づくりの里と名付けられた畑があり、地域の住民が亜麻を栽培している。亜麻の花が咲く時期は花の観賞ができて、広く知られている。麻生に住む人たちの努力を亜麻忘れじの観点から評価したい。

もう一つの記念碑は網走郡美幌町三橋町20番地の「史跡亜麻工場跡」である。美幌町の教育委員会が建立している。帝國製麻が大正9年（1920）に建設し、昭和37年（1962）まで操業している。大正9年

写真1：明治44年（1911）時の帝國製麻札幌工場



明治20年（1887）に北海道製麻が設立され、最初に建設された製麻工場である。北5条東1丁目の創成川沿いに建設された。北海道で最初の大工場であった。当時の原料は大麻が主体であったが、亜麻の栽培を増やして切り替える計画であった。我が国で初めての亜麻工場は明治22年（1889）に雁木に建設された。北海道製麻は明治40年に日本製麻と合併し、後に帝國製麻と改称されている。（帝國製麻30年記念誌）

写真2：現在も遺る札幌工場の煙突

軍需品の中で最も必要の多かったのは帆布であった。札幌工場は帆布を主力製品としており、それだけに動乱景気に左右されることが多かった。亜麻工場は全道に建設されたが、現在ではその面影を残すものは何も見当たらない。珍らしく札幌にこの煙突だけが産業遺産として聳えて、かつての繁栄を誇示している。



62）まで操業している。大正9年と言え、第一次大戦による好景気がまだ残っている時期であり、また、亜麻栽培の中心が十勝・網走・上川の大規模畑作地帯に移りはじめていることを考え合わせると、一つの流れであったと思える。

当時網走には農産加工の企業はほとんど進出しておらず、地域の大きな期待を担ったものと言える。「美幌の亜麻工場」が編纂されているが、栽培面積は300ha程度であったものが、昭和20年（1945）には600haに達し、全耕地面積の10%に達している。平成17年（2005）に「亜麻のふる里研究会」が結成されるなど、亜麻に対する思い入れは強い。

昭和生まれの人たちは亜麻工場が閉鎖されても、亜麻工場については、多くの人が記憶に留めている。平成生まれの人たちには亜麻についてはまったく知られていないと言っているであろう。昭和生まれの人たちの大きな違いである。昭和の人たちが亜麻工場と言うと忘れてしまうように、亜麻工場は地域の人たちが何らかの形で係わりを持ち、地域の経済を豊かにしたからであろう。亜麻茎の浸水発酵の臭いも我慢したのは、時代が鈍感であったのかもしれないが、それよりも亜麻工場には恩恵も感じ、親しみを抱いていたからと言えよう。